

パネルディスカッション 「東日本大震災の報道」

パネラー



毎日新聞 社会部 編集委員

萩尾 信也 氏

北海道新聞社 東北臨時支局編集委員

勝木晃之郎 氏

十勝毎日新聞社 編集局デスク

横田 光俊 氏

コーディネーター

十勝毎日新聞社 NIEコーディネーター 若山 茂樹 氏

パネルディスカッションの概要

【若山】震災への各新聞社の向き合い方、取材方針とは。

【萩尾】まず動き、現場に赴き、その場において、音を感じ、人々の思いを聞くというのが基本だ。ミクロ、マクロの視点で新聞社や個々が積み重ねてきた経験や記者の思いを、その場その場で積み上げて報道している。

【勝木】震災以降に設けた仙台の東北支局で2人で詰めている。北海道は東北の漁業とも関係が深く、特に宮城県気仙沼の様子を定点観測的に取材し、悲しみや喜びなどをつづる形で30回ほど連載した。



【横田】日本に巨大津波が来た痕跡があると、大学の調査をもとに報道したのが1998年。もし2000年初頭にこの調査を東北でやっていたらと、反省の残る一報だ。新聞社の使命は、現場の人間がそのつど判断して動き、地域に起こり得る自然災害の危険性を周知して、住民が防災行動を起こすまで責任を持つことだと思っている。

【若山】それぞれのこん身の記事について。

【勝木】2月下旬に掲載した「北海道 東北考」は、三陸沿岸の水産業について書いた。国は協同組合を通じ漁業支援はしているが、企業形態の水産加工業は個人の蓄財につながるとして補助金が行き渡らない。宮城県女川町のサンマ水産加工場が、国の保障もない再建が極めて難しい中で操業を目指す様子を取材した。これを取り上げたのは、19年前に津波被害に遭った奥尻島が、復興は早かったのに衰退した理由の一因として、漁業の付加価値を高める水産加工場が元に戻らなかったからだ。

【横田】十勝は50年周期に十勝沖地震がある。前回の地震から50年目の2002年、社会面見開きを使い、さらに5回企画を連載し注意喚起をした。実際に翌年、地震は起きた。読者から、「1年前の報道で覚悟がついた」との声をいただき、新聞も若干の力はあると思った。

【萩尾】震災直後から1年間、三陸の岩手県釜石市を拠点に二百数本のルポを書いた。取材を通じて、「生きる意味とは何か」「悲しみは時間が解決するというが、うそではないか」「頑張れという言葉に腹が立つ」という、問いかけをもらった。答えることはできないので、やりとりの記録を残した。記者はある意味、イタコ（東北地方に伝わる民間信仰で、霊的能力を持つ女性）。何度も通って、彼らの心の中にまで入り込み、記憶を言語化する仕事なので、取材された相手は、眠れない、時には熟睡できたという人もいる。被災地の人との出会いがあって、初めて「三陸物語」ができた。

【若山】現在の震災報道の状況を。

【横田】学校や地域で大災害が起きた場合、子供をどう守るかが課題だ。特に北海道東部で大地震が起こる可能性は高い。浦幌町厚内小学校は、現場の先生が中心となり、東日本大震災時の対応について公的機関も入って検証している。子供の訓練を年10時間も重ねている。その様子をルポした。新聞より世の中が進み始めたと感じた。現場の先生にどんどん動いてもらい、新聞を使って広めてもらいたい。

【萩尾】被災地の人は、「3・11」という言い方が記号化された過去のようだと嫌がる。言葉の使い方は非常に難しい。「絆」「復興」という言葉も、その場のさまざまな思いや何もかもをくるんで、思考を封印している。過去ではなく今何が起きているのか絶えず意識して書いていきたい。あの場に身を置かせてもらったお礼が、語り継ぐことだと思っている。

【勝木】北海道は地震が起きて、強く東北を意識した。改めて東北・北海道の関係を見つめ直そうと、農業、漁業、次は物流に視点を置いて取材を進めている。3年したら道新幹線もつながり、人の流れも大きく変わる。復興につなげていかななくてはいけない。



【若山】最後に教育現場へのメッセージを。

【萩尾】東北は、高齢化、就労問題など日本の将来を先取りし、生死の問題を含めいろんな問いかけがある。多くの人が後世に生かしていくべきだ。

【勝木】復興の遅れを見ても、日本人の非常時の対応力はかなり劣化している。必要なときはルールを飛び越えても、臨機応変に対応できる子供を育ててほしい。

【横田】新学期が始まったらあらゆることを想定して、もう一度防災体制を見直してほしい。日ごろから新聞を読んでいる先生が、行動を起こしてくれれば災害に強い日本になる。

パネルディスカッションを終えて

コーディネーター 若山 茂樹

すべての国民も、あるいは全世界も心を痛めた東日本震災を、どのように人々の心に前向きに生かす活動をしなければならないのかは、人類的な課題ということもできましよう。

報道、特に新聞は、その最前線でした。交通もライフラインも途絶えた被災地で、目の前で今おきていることを読者に伝える情報を集め、とりわけすべてが遮断された被災者に届けようとする連日、そして予兆データを含めこの日を危惧していた新聞マンは、まさに仕事は戦いという実態であったことを参加者みんなで見止めたと思います。

全国新聞教育研究大会では、単に授業に役立つということのみではなく、報道が人々に与える限りない力を学ぼうと、新聞各社のディスカッションを企画しました。

新聞を通して学ぶということは、現実や事実を直視し、自分が生きている社会から課題を見つけ、考え、解決する力を培おうとすることです。もちろん、このことには若いも若きにもその差はないことです。毎日新聞社、北海道新聞社、十勝毎日新聞社ともに、最高のスタッフで報道の本質を説いてもらいました。

学校サイドで今日的に学びの大切さを訴える際、「主体的に学習に取り組む意欲」「思考力、判断力、表現力」「言語活動」などをあげますが、実は、大人社会ほどこのことの必要性に迫られているのです。

災害はないほうがいいことはもちろんですが、起きてしまったときにこそ、大人その力が確かめられます。その際に人々の心に呼びかけるのが報道、なかんずく新聞です。大人社会が子ども社会に多くを伝える責務を明らかにしたパネラーのみなさんに感謝します。

くじけない心を訴えてくれたことを、参加者のみなさん共々に、しっかりと教室でも社会活動でも伝えていこうではありませんか。

